

(別紙様式 = 小学校用)

都道府県番号	34
都道府県名	広島県

【 】
*重点をおいた観点にチェックすること

学校名及び規模

学校名	広島県賀茂郡黒瀬町立下黒瀬小学校								
学 年	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特殊学級	計	教員数
学級数	3	2	3	2	2	2	2	16	34
児童数	86	78	85	70	66	69	4	458	

研究の概要

(1) 研究主題

確かに学び、豊かに生きる児童の育成
～個に応じた指導方法の工夫と望ましい生活習慣の育成～

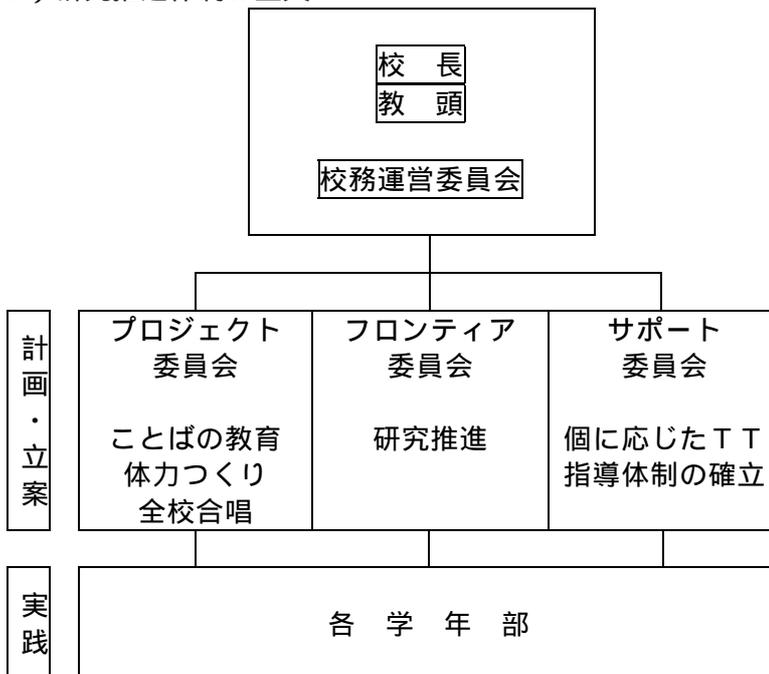
(2) 研究主題の趣旨

今年度は、「5つの力（ 見つける力， 調べる力， まとめ伝える力， かかわる力， 生かす力）」の基礎として，一人一人に確かな学力をつけることを目的とする。そのために，基礎の充実として，「フロンティアプロジェクト」（習熟度，コース別学習の導入），「パワーアッププロジェクト」（朝の計算・視写の学習，授業始めの学力定着の時間の活用），「サポートプロジェクト」（学習上配慮を要する児童を対象としたチームティーチングの活用），「ことばの教育プロジェクト」（書く・話すを中心とした言語力の充実）という4つのプロジェクトを中心に研究する。

また，確かな学力を支えるものとして，「豊かな心」「たくましい体」を育てることが大切であると考えている。

研究の概要

(1) 研究推進体制の工夫



(2) 研究の実際及び成果
児 童

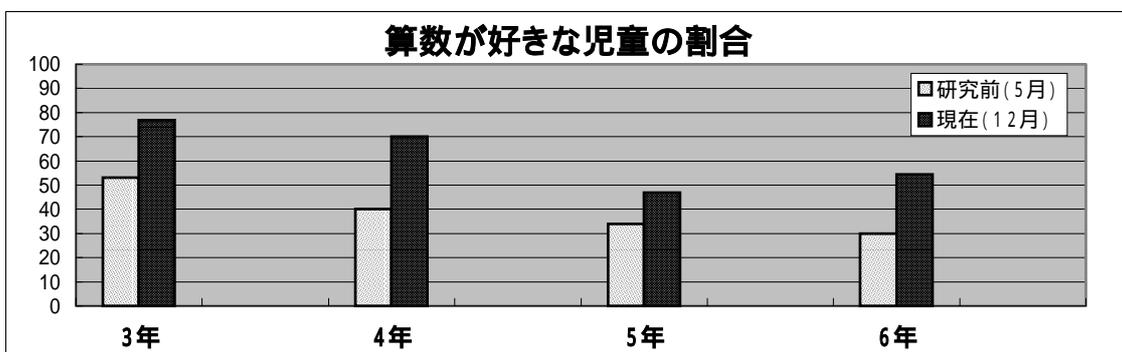
「算数科が好きな児童が増えてきた。」

次のページのグラフは、今年度の5月と12月の児童アンケートの結果である。

5月は、まだ研究の実践を始める前の状況であり、12月は各学年とも習熟度別のコース別学習終了直後の状況である。

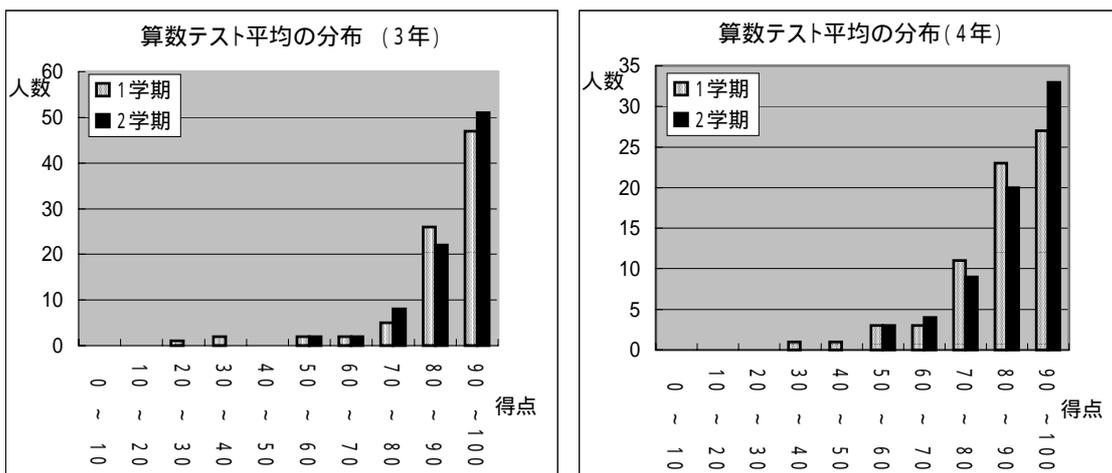
各学年とも5月と比べて12月のほうが「好き」と答えた児童の割合が高くなっている。

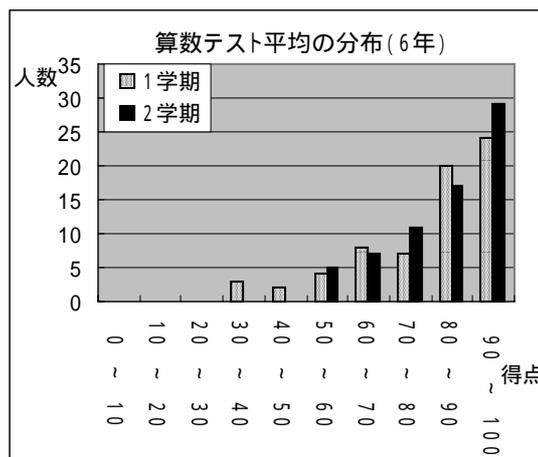
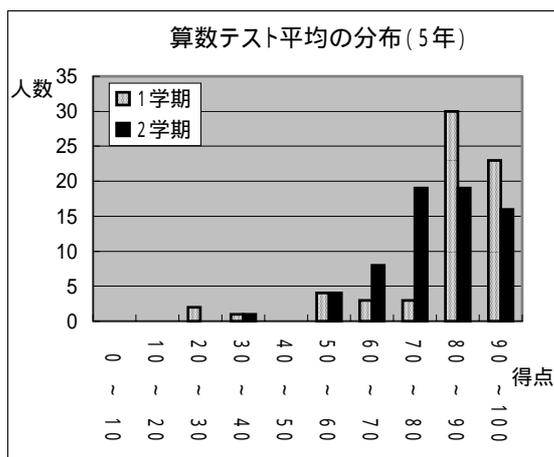
習熟度別学習を通して算数への意欲が向上してきていることがわかる。ただ、依然として学年があがるにつれて「好き」と答える児童の割合が低くなっている実態を受け止め、高学年における意欲の向上のための取り組みを進めていく必要がある。



「集団全体としての学力が向上してきた。」

下のグラフは、1学期と2学期における算数科業者テストの得点平均の分布を比較したものである。得点分布がグラフの中で右(高得点側)に移行し、分布範囲の幅が狭まることで児童全体の学力が向上していると判断する。





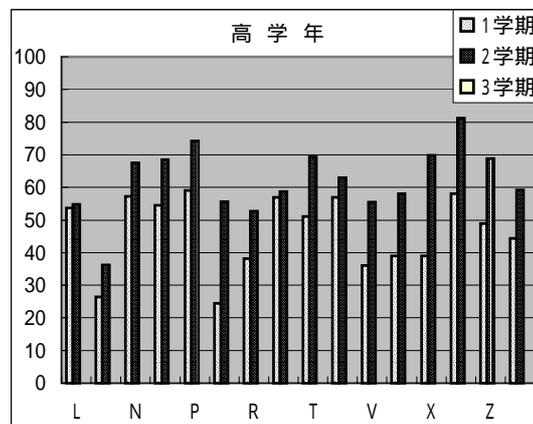
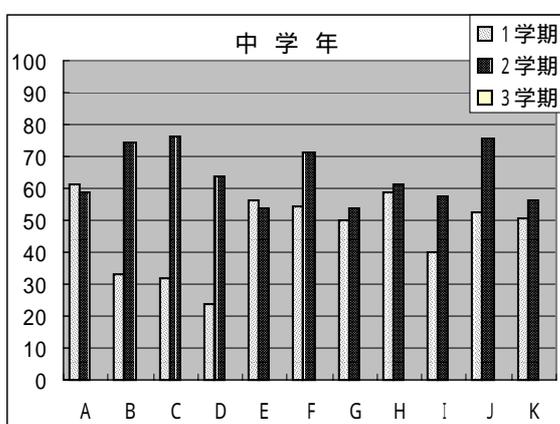
どの学年も分布が右(高得点側)に移動しているとともに分布の幅も狭くなってきている。また、5年を除いて得点が多くなるほど人数も増え、全ての得点層にわたって少しずつ取り組みの成果がでてきていることが分かる。

ただ、どの学年にもまだまだ学力面での課題の大きい児童が多く存在していることは事実であり、個人に応じた取り組みをさらに進めていかなければならない。

「定着が不十分な児童の学力が目だって向上してきた」

下のグラフは、様々な原因から学力的に定着が不十分な児童(1学期の時点で平均60点未満の児童)の算数科における学期ごとの得点の変化をグラフにまとめたものである。

算数科のテストにおいて定着が不十分(平均60点未満)だった全児童の得点変化



変化が見られなかったり、得点が下がり気味だったりした児童も若干いるが、ほとんどの児童が1学期と比べて2学期にはかなりの向上が見られる。個々の児童によって課題とそれに対する手だては様々なので、全体としての共通する要因を挙げることは難しいが、少なくとも個人に応じた指導の成果は出てきていると思われる。

**習熟度別指導による個々の児童の実態に応じた授業の展開
サポート体制：サポートティーチャー(専科担当)の継続的な支援システム
反復練習の積み上げによる計算技術の向上**

しかし、依然として大きな課題を抱えている児童も多数存在するので、これからも地道な取り組みを進めていきたい。

個に応じた指導方法・指導体制

「学年に適した指導形態と留意点が少しずつ明らかになってきた。」

単元内容の指導	単元末のまとめ
---------	---------

レディネス テスト	学 級 内 T T 指 導			低学年
--------------	---------------	--	--	-----

レディネス テスト	学級内 TT指導	ふり返り テスト	学級内習熟度別指導(2コース) コース移動自由(「同一目標・異種作業」のため) 担任とFTで担当を途中で交代	中学年
--------------	-------------	-------------	--	-----

レディネス テスト	学級内 TT指導	ふり返り テスト	学年内習熟度別指導(3コース) コース移動なし(進度を変える必要+選択に責任) 単元ごとにコース担当者を変える	高学年
--------------	-------------	-------------	---	-----

低学年 「学級内TT指導」 <きめ細かい指導重視>

低学年の児童は、基本的に正確に自己評価することは難しい。そのため、コースを選ぶ基準が曖昧になる。「座席表指導案」を活用して、指導者が一人一人の実態や学びを整理しながら、TTによってきめ細かく指導していくことが、児童にとってよい。ただ、単元内容の指導段階で明らかに判断基準に達しない児童が多かった場合は、単元末のまとめ段階で、同一教室内での「ミニ授業」において対応する。

中学年 「学級内2コース習熟度別指導」 <速度と活動重視>

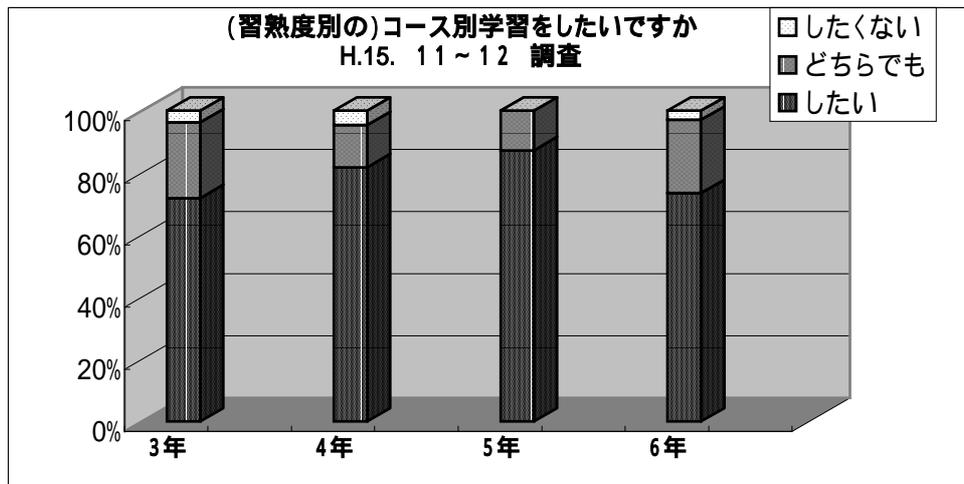
学年指導内容・過去の学習内容の量がそれほど多くないため、基本的に理解・速度の差に応じて「同一目標・異種作業」の学級内2コースを設定すれば、無理なく児童の実態に対応できた。しかも、確実に少人数になることで児童の学ぶ意欲も向上する。本校の場合、基礎コースと標準コースの人数比は約1:2となり、基礎コースの児童に対してきめ細かい指導ができた。

高学年 「学年内3コース習熟度別指導」 <教材重視>

高学年になると学年指導内容も高度になるとともに、過去の学習内容を生かさなければできないものがほとんどである。したがって、児童の習熟の差に応じるためにはどうしても3コースを設定する必要がある。そのため、学年内でのコース編成が必要となってくる。児童の実態に応じて学習を展開するためには、どうしても同一目標・異種作業では対応しきれないため、進度も違いを持たせて指導する。したがって、コース移動はなしとする。

上記のように、設定した一つの理由として、以下のグラフを挙げる。

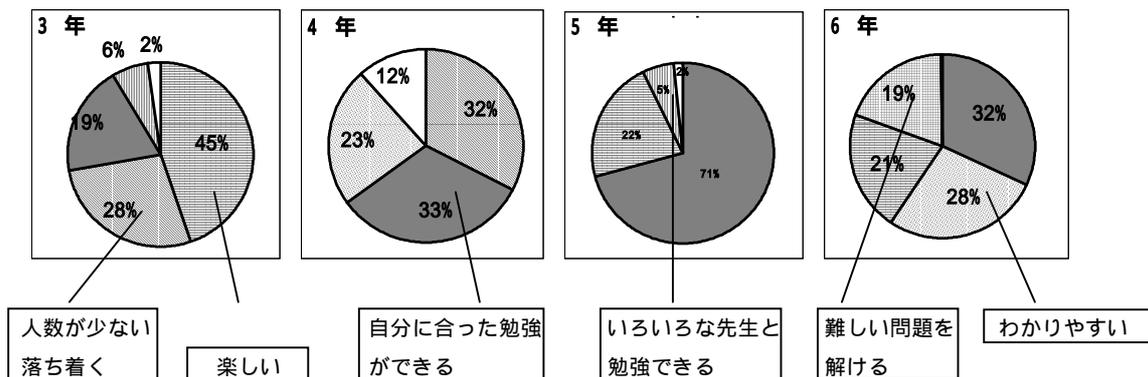
下のグラフは、習熟度別のコース別学習をした後の児童のアンケート結果である。



各学年とも、これからもコース別学習をしたいという児童が圧倒的に多い。この傾向は特にじっくりコース（基礎コース）の児童のほうが大きい。

続いて、「コース別学習をしたい」と回答した児童の「したい理由」を学年ごとに整理してみた。

習熟度別のコース別学習をしたいと思う理由



アンケートの結果、全学年に共通するのは「自分に合った勉強ができる」という回答である。

中学年に共通点するのは、「人数が少ない、落ち着く」という回答である。「指名されやすい」という少人数指導としてのメリットが現れてきている。

高学年になると、少人数のメリットというよりも、自分に合っている（問題）という点が特徴として現れてきている。

個に応じた指導のための評価

「きめ細かい指導に生かすための評価のあり方が少しずつ明らかになってきた」

「座席表指導案」の有効活用（各時間の指導 児童の履歴 成果の蓄積）
 <座席表指導案の継続活用の実践例 ～1年「ひき算（3）」>

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
繰り下がる計算の仕方																
減加法の理解	▶	△	▶	▶	▶	▶	▶	▶	▶	▶	▶	▶	△	▶	▶	
減加法での計算	△	△	▶		△	▶	▶	▶	▶	▶	▶	▶	▶	▶	▶	▶
減々法の理解	▶	△	△	▶	▶	△	▶	▶	▶	▶	▶	▶	▶	▶	▶	
減々法での計算	▶	△	▶	▶	▶	△	▶	▶	▶	▶	▶	▶	▶	▶	▶	
減法の理解深化(求差)	▶	△	▶	▶	▶	△	▶	▶	▶	▶	▶	▶	▶	▶	▶	
減加・減々に習熟	2	加	2	2	2	加	2	加	減	2	減	2	加	加	2	加
まとめ(自由進度)																

	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29
繰り下がる計算の仕方	▶	▶	▶	▶	▶	▶	▶	▶	▶	▶	▶	▶	野線が移動します
減加法の理解	▶	▶	▶	▶	▶	▶	△	▶	△	▶	▶	▶	▶
減加法での計算	▶	▶	▶	▶	▶	▶	△	▶	△	▶	▶	▶	▶
減々法の理解	▶	△	▶	▶	▶	▶	△	▶	▶	▶	▶	▶	▶
減々法での計算	▶	△	▶	▶	▶	▶	▶	▶	▶	▶	▶	▶	▶
減法の理解深化(求差)	▶	▶	▶	▶	▶	▶	▶	▶	▶	▶	▶	▶	▶
減加・減々に習熟	2	加	加	減	加	2	減	加	減	加	減	2	2
まとめ(自由進度)	▶	▶	▶	▶	▶	▶	△	▶	▶	▶	▶	▶	▶

< 継続指導の経過 > 児童の履歴であり指導者の成果の蓄積でもある。

- 2の児童 ... 具体物は動かしてよくできるが、言語化することが難しい。特に減々法は難しいので、ひとつひとつ操作と言葉をつなげていくことで、少しずつできた。理解することより、解いていくことから理解につながるの、時間をかけて問題をたくさんこなしていった。
- 6の児童 ... 減加法はよく理解したが、減々法がわかりにくかった。時々両者を混同するため、計算することよりタイルを使って計算の意味理解を確かにする練習を休憩時間にも行った。ワークシートを数種類用意したり、ヒントを出したり、ミニ授業を行ったりして、支援してきた。
- 18の児童 ... いくつといくつの復習をしっかり行った。サクランボをつけるとほぼまちがいなくできるようになった。サクランボに10を書いたもの、サクランボだけのもの等のワークシートの工夫を行った。
- 23の児童 ... 被減数をわけるという考え方が難しかった。反対に減数をわけの方が自然にできた。そこで、この児童にはパタパタタイルを用いることにした。10といくつという考えや、10からとるという解き方の理解に非常に有効であった。
- 25の児童 ... 23の児童と同様、減加法がよくわかっていなかったが、減々法の理解が深まると、減加法を考えていく余裕も出てきた。パタパタタイルを用いることで理解が深まった。

(3) 研究の課題

考える力を伸ばしていくための系統的な取り組み
自己評価に基づく系統的な補充学習
発展的教材を視野に入れた個に応じる指導のための教材開発

(4) 研究成果の普及の方策

下黒瀬小学校研究会
・平成15年2月19日(木)
・本校の研究の提案(授業公開, 研究内容)
HP作成・公開
・研究内容
・実践内容(教材・評価)

次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。(複数チェック可)

【新規校・継続校】	15年度からの新規校	14年度からの継続校		
【学校規模】	6学級以下 13～18学級 25学級以上	7～12学級 19～24学級		
【指導体制】	少人数指導 一部教科担任制	T・Tによる指導 その他		
【研究教科】	国語 生活 体育	社会 音楽 その他	算数 図画工作	理科 家庭
【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】		有	無	

【特色ある取組み事例としての紹介したいポイント】

学年に応じた指導形態と評価を生かしたコース設定・コース選択により、習熟に応じた指導が有効に行え、学習意欲と学力が向上したこと。